

「額は晴やか」の意味

中野伸彦*

The Meaning of "Hitai ha Hareyaka"

NAKANO Nobuhiko*

(Received September 22, 2022)

森鷗外作の「高瀬舟」では、高瀬舟で送られる罪人喜助について、「その額は晴やかで目には微かながやきがある」という描写がなされている。本稿では、近代の「額は晴やか」の用例をもとに、ここで言う「額は晴やか」は、困る様子・憂鬱な様子が見られてもよさそうな状況において、困る様子・憂鬱な様子が見られないことを表すものではないかということ述べる。あわせて、「目には微かながやきがある」の意味についても触れ、庄兵衛の「喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、横から見ても、いかに楽しむので……」という観察と、「その額は晴やかで目には微かながやきがある」という地の文の描写の間には懸隔があると考えるべきではないかということ指摘する。

一 はじめに

森鷗外作の「高瀬舟」（一九一六年）に、高瀬舟で送られる罪人喜助について、「その額は晴やかで目には微かながやきがある」¹ 『山椒大夫・高瀬舟』（新潮文庫）208頁、以下「高瀬舟」の引用は同書による）という表現がある。本稿では、この「額は晴やか」がどのような状態を指しているのかを考察することを中心とする。あわせて、「喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかに楽しむので」（208頁）のような、庄兵衛の喜助理解には、理解違いと言すべきものがあるのではないかとこのことを述べていく。

二 「額は晴やか」の意味

そもそも、「額」が「晴やか」であるとは、どのようなことを指す表現だった

たのだろうか。現代語では、「額」が「晴やか」であるというような表現自体、普通には用いないように思われるが、近代には、次のような例がある。

1 二十五年前から行はれてるカトリック教改新の盛大な運動、理性と自由とを取入れたために為されてる、フランスに於けるキリスト教的思想の力強い努力、それをオリヴィエはクリストフに示してやった。立派な牧師達が居て、その一人が云つたやうに、「人間たるべき洗礼を受ける」だけの勇氣を持つてゐて、凡てを理解しあらゆる誠実な思想を懐くだけの権利をカトリック教のために要求してゐた。なぜなら、「あらゆる誠実な思想は、たとひそれが間違ふことはあつても、常に神聖で崇高である」からだつた。また数千の若いカトリック教徒らが居て、善良な意志を持つてゐる者には誰にでもうち開かれてる、自由な純粋な博愛なキリスト教の共和国をうち建

* 山口大学教育学部、〒753-8513 山口市吉田1677-1、n_nakano@yamaguchi-u.ac.jp

てんとの、勇ましい願望を懐いてゐた。そして、忌はしい攻撃や、邪教だとの誹謗や、保守急進両派の——（殊に保守派の）——不実な裏切りなどを、それらの偉大なキリスト教徒らは絶えず受けるにも拘らず、勇敢な小団をなして、永続的なものを築くには涙と血とで固むるの外はないと知りながら、苦難を忍従し晴れやかな額をして、未来に通ずる峻峻なる隘路を進んで行きつゝあつた。（ロマン・ロオラン 豊島与志雄訳『ジャンクリストフ 第三編』〈新潮社〉286頁、一九二二年）

2 父の放漫な暮し方のため、資産状態が可なり危ないことになっているのを、山川正太郎はうすうす知っていました。そしてそのことは、父の死後、塚本老人によって具体的に明示されました。

「しかと、方策を立てなければなりません。お母上はあの通りでいられますし、あなたの責任が重いというわけでございますよ。」

ただそういう風に、塚本老人は言いました。ところが、その方策の一つがもう、塚本老人自身によって考案され、実行に移されかけているのでした。

山川家が所有している工場が一つありました。規模はささやかなものでしたが、そこに、可なりの資材が蓄積されていました。それは塚本老人の配慮に依るとのことでした。資材のなかの主要なものとして、美製鋼板、俗にミガキ鋼板というのが約八十噸あまりありました。

そのことを、工場長の上原稔から聞かされて、山川正太郎はちと意外に思いました。ところが、それに関する上原稔の話は、更に意外なものでありました。

概略しますと、次のような話でありました。この八十噸のミガキ鋼板は、公定価格の三倍ほどの時価で、直ちに引受者がある。つまり、八十万円ほどになる。ところで、今回、山川さんが某政党に領袖の一人として加入するについて、相当の金が必要である。そこで、右の鋼板を売却したいと思うが、如何であろうか。

それが、塚本老人からの申し込みでありました。

上原稔は反対しました。塚本老人は説きました。——山川家のためだから、まあ我慢して貰いたい。鋼板をそっくり転売してしまつても、職工たちに仕事不足するわけではあるまい。真鍮の屑物が多量あるから、それを加工すればよからう。また、たとい鋼板を扱って、各種の器物を製造するにしても、多くの熱量

を要することだし、その辺の見通しが困難ではあるまいか。すべて山川家のためだから、よく考えておいて貰いたい。

その話、大旦那が亡くなったばかりのところではあるし、若旦那にはさし当り内分にとの話、上原稔は山川正太郎に打ち明けてしまいました。

「私はただ、職工達を存分に働かしてやりたいと思つています。みな、立直つた気持で、働きたがつております。鋼板は彼等の手に渡してやつて下さい。同額の給与を貰つても、遊んでいるより働く方が本望だと、そういう彼等の意気を、私は涙の出るほど嬉しく思います。それで、お願いにしました。」

額が晴れやかで、色が黒く肉のしまった、その上原稔の熱情は、山川正太郎にも伝わりました。けれどその時は、山川正太郎はただ次のように答えました。

「よく分かりました。もう少し考えた上で善処しましょう。」（豊島与志雄『乾杯』『豊島与志雄著作集 第四卷』〈未來社〉157頁、一九四六年）

この、二つの例に共通するのは、「困難な状況にあつても、くじけない様子」といったことである。（2については、わかりにくいかもしれないが、山川正太郎の父の死後、山川家所有の工場にある資材を売って、新主人となる山川正太郎の政党入りの資金にするという塚本老人（若い頃から、山川正太郎の父の近くにいた人物）の案を実現させまいと、工場長の上原稔が、山川正太郎に、いわば、直訴を試みる場面である。主人を説得できるかどうかという、難しい直訴の場面においても、くじけず、熱情を持って願いを聞き入れてもらおうとする上原稔の姿についての描写である。）

また、これも、現代語では用いない表現のように思うが、近代においては、「額を曇らせる」・「額に影がかかる」で、自分の思い通りの返答を得られず困る様子・憂鬱な様子を表した例がある。このような例をあわせて考えると、「額」が「晴やか」であるとは、困る様子・憂鬱な様子が見られてもよさそうな状況にあつて、困る様子・憂鬱な様子が見られない（「額」に「曇り」や「影」がない）ことを表していたと考えられるように思う。「高瀬舟」の例についても、流罪で島へ送られる途中という、困る様子・憂鬱な様子が見られてもよさそうな状況において、困る様子・憂鬱な様子が見られないことを述べたものと見て無理がない。

3 令嬢の資格が略定まった時、父は代助に向つて、「大した異存もないだろう」と尋ねた。その語調と云い、意味と云い、ど

うするかね位の程度ではなかった。代助は、

「そうですね」とやっぱり責え切らない答をした。父はじつと代助を見ていたが、だんだん皺の多い額を曇らした。兄は仕方なしに、

「まあ、もう少し善く考えてみるが可い」と云って、代助の為に余裕を付けてくれた。(夏目漱石『それから』〈新潮文庫〉223頁、一九〇九年)

4 「なんだか……憂鬱そうですね。」

さりげなく云われたそういう言葉に、私はふっと、白けきった気持ちになつて、酒の酔もさめて、自分の顔付が頭の中に映つてくることがあります……。私が鏡を見るのは、髻をそる時、髪をなでつける時、まあそんなものですが、それよりもっとはつきりした鏡が頭の中にあつて、それに自分の顔付が映ってきます。——額は酒の酔に赤くほてっているのに、額に薄暗い影がかかつていて、眼尻にいくつも小皺がより、厚い唇がだらしなく開き、そして眼付が、物珍らしそうにきよろきよろあたりを見廻したり、またぼんやり曇ったりします。その全体が……そう……やはり憂鬱そうですね。……以前はこんなじゃありませんでした。ついこの頃のことです。(豊島与志雄『肉体』『豊島与志雄著作集 第三巻』〈未来社〉427頁、一九三五年)

なお、「晴やか」というと、現代語では、単に曇りや影がないということではなく、積極的に、快活な様子を表しているように感じられるように思うが、近代の「晴やか」は、単に、曇りや影がないということを表していたのだと考えられる。次は「面(おもて)」について、「晴やか」を用いた例だが、能登守は、「曇らせました」と書かれる前において、来客がある事に対して迷惑がっていたのであり、決して、積極的に快活な表情をしていたのではないであろう(引用部分の少し前には、能登守の寝顔について、「この数日、主人の髪も乱れているし、それに寝ている面にも寝れが見えていました」(349頁)ともある。)

5 「あ、ついうとくと寝入ってしまった」

能登守は椅子に埋めた身体を少しばかり起そうとしました。

「あの、お客様でございますが」

とお君が言いました。

「客」

能登守は小首を傾げて、

「言うて置いた通り、この仕事をはじめてからは、大抵の客には会いたく

ないのじゃ」

「それでも強つてお目にかかりたいと、そのお客様からのお願いでございますが」

「それは誰じゃ」

「女のお方でございます」

「女の……」

「はい、神尾主膳様の御別家の御新造と申すことでございます」

「ははあ」

駒井能登守は、直ぐにそれと頷く処のものがありませんが、

「どのような用向か知らん、わしは会いたくない、誰か会つてもらいたい」と会うことを多少迷惑がるようでありました。

「それでも殿様に、直にお目通りを致さねば申上げられない事なのだそうでございます。それが為め、小島様も服部様も、わたしにお殿様へお取次申して見るように、お頼みでございました」

「はてな」

能登守は、その晴やかな面を少しく曇らせました。

「兎も角、彼方へお通し申して置くがよい、暫らくの間お待ち下さるよう

にお断りをして」

「畏まりました」

「それから、お前は、わしの羽織だけを此処へ持って来て呉れるように」

「畏まりました」(中里介山『大菩薩峠』【都新聞版】 第五巻〕〈論創社〉350頁、一九一八年)

「額」について「晴やか」を用いた、1・2の例についても、積極的に快活な様子であったとは考えにくい状況である。「高瀬舟」の例も含めて、困る様子・憂鬱な様子が見られないということのみを表しているものであり、積極的に快活な様子を思い描くべき表現ではないのだろうと考える。

三 「目には微かながやきがある」の意味

「高瀬舟」では、「額は晴やかで」に続いて、「目には微かながやきがある」と書かれている(「微かな」は「かすかな」)。この、「目には微かながやきがある」は、どのような様子を表しているのであろうか。

6 そんななかで大石先生は三人の子の母となっていた。長男の大吉、二男の並木、末っ子の八津。すっかり世の常の母親になっている証拠に、ねえ

さんとよばれた。だがよく見ると、目のかがやきの奥に、ただのねえさんでないものがかくれている。(壺井栄『二十四の瞳』〈岩波文庫〉196頁、一九五二年)

現代語で「目のかがやき」と言うと、意欲のようなものの表れと感じられるように思うが、右の6のような例を見ると、「目のかがやき」がある状態は、普通の状態であり、次の7の例のように、かがやきがない状態が、「沈みこんだ」状態を表すというのが、かつての用法だったようである。(現代語でも、「目にかがやきがない」は、沈みこんだ状態を表すであらうし、「ふだんと違う目のかがやき」のように、「ふだん」でも「目のかがやき」があるとする意識に基づく表現は残っている。)

7 別所は近頃、神経衰弱の気味だといって仕事も粗漏だったし、元気がなく蒼ざめ、眼に輝きがなく、へんに陰鬱に沈みこんでいた。(豊島与志雄『浅間噴火口』『豊島与志雄著作集 第四卷』〈未来社〉17頁、一九三八年)

今述べた理解が正しいとすれば、「目には微かなかがやきがある」という状態は、普通の状態ではなく、「沈みこんでいる」ほどではないとしても、普通よりはやや沈んだ状態にある様子を表していると考えることができる。

四 庄兵衛の理解との食い違い

これまで述べて来たように、「その額は晴やかで目には微かなかがやきがある」が、額には困る様子・憂鬱な様子が見られず、目は、やや沈んではいるが沈みこんでいるとまでは言えない様子を表すと考えるとき、気になるのは、それに続く、庄兵衛の喜助理解「庄兵衛はまともには見ていぬが、始終喜助の顔から眼を離さずにいる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返ししている。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、若し役人に対する気兼ねがなかったなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしそうに思われたからである。庄兵衛は心の内に思った。(略)この男はどうしたのだろう。遊山船にでも乗ったような顔をしている。」(208頁)との食い違いである。庄兵衛に見えているのは、額には困る様子・憂鬱な様子が見られず、目は、やや沈んではいるが、沈みこんでいるとまでは言えない様子ではなく、より積極的に、「楽しそう」な様子である。「その額は晴やかで目には微かなかがやきがある」と語り手が述べるところと、この庄兵衛の喜助理解には、大きな違いがある。額には困る様子・憂鬱な様子が見られず、目は、

やや沈んではいるが、沈みこんでいるとまでは言えない様子であれば、「庄兵衛がためには喜助の態度が考えれば考える程わからなくなる」(209頁)と書かれているほど、わからないものではないであろう。「楽しそう」な様子を見て取るがゆえに、「考えれば考える程わからなくなる」のだろう。これが、庄兵衛の主観の産物であることは、「庄兵衛がためには」という限定がつけられていることから読み取りうる。「くがためには」という表現は、次のように、一般とは異なる、「く」にあたる人物に特有の理解であることを表す表現であると考えられる。

8 人生の評価は千殊万別である。父が北千住に居った時、家に一婢があつた。肥白にして愛想好く、举止もまた都雅であつた。然るに此婢の言ふ所は、一々わたくし共兄弟姉妹の耳を驚かした。婢は幼くして吉原の大籠に事へ、忠実を以て称せられてゐた。その千住の親里に帰つたのは、年二十を踰えた後である。

婢は「おいらん」を以て人間の最尊貴なるものとしてゐる。公侯伯子男の華族さんも、大臣次官の官員さんも婢がためには皆野暮なお客である。(森鷗外「細木香衣」『鷗外選集 第六卷』〈岩波書店〉) 329頁、一九一七年)

9 「まあ、あのベルナルドという人が亡くなりましたの。」女は男の持つて居る新聞を取つて覗いて見た。「まあ、好い気味だ事」と口まで出そうなのを、女は堪へてゐた。

この出来事は、二人が為めには、大層意味があるやうに思はれた。ベルナルド教授は自分が飽くまで健康であつて、さも豪さうに専門の知識を吹聴して、見て貰ひに行つた男の希望を打ち破つてしまつたのに、自分が却て数日間に死ななくてはならなかつたのである。今あの人が死んだといふ事を聞くと同時に、男はこれまで心の底でひどくあの教授を憎んでゐた事を自覚した。そして自然にその復讐が出来たのを、自分の運命の爲めに大層好い前兆でもあるやうに感じた。言つて見れば自分の身の周囲から、気味の悪い幽霊を逐ひ退けてしまつたやうな心持ちである。(シュニツレル 森鷗外訳「みれん」『鷗外全集 第九卷』〈岩波書店〉402頁、一九一二年)

「その額は晴やかで目には微かなかがやきがある」については、「正当性、自信、充実感、希望のある表情である」(松田(二〇〇九) 54頁)と解釈されたり、「その表情を(額は晴やかで目には微かなかがやき)と見たのは、むしろ

「庄兵衛である」（三好（一九八九）79頁）と、庄兵衛の理解であるとされたりして、「額は晴れやかで、目にはかすかな輝きがある」「いかにも楽しそう」な喜助の様子からは弟を殺した罪人としての気持ちは感じとれず、「晴れやかで」「楽しそう」な喜助の姿（角谷（二〇〇一）151・160頁）のように、「いかにも楽しそうで」の記述と、一続きのものとして扱われることが多いが、これらは、現代語の「晴やか」や「目のかがやき」に引かれた誤解であるのではないかと考える。

庄兵衛の喜助理解が、客観的なものと言えないことについては、「かくして喜助に対する「驚異の目」も、喜助の頭にさす「毫光」も（略）庄兵衛の主観を通じてのみ幻視されたものであることを、無視することは許されない」（小泉（一九九〇）27～28頁）とあるのははじめ、諸氏の指摘されているところであるが、この、「その額は晴やかで目には微かなかがやきがある」の後に描かれている「楽しそう」という理解についても、庄兵衛の主観の産物であるということが言えるのではないだろうか。

五 「額」の意味

最後に、「額は晴やかで」の「額」は、顔のどの部分を指すのかについて、述べたい。

現代語で、「額」は、「眉間」を含まないように思うが、近代には、次の例のように、同じ場所を指して、「眉間」とも「額」とも言っている例がある。

- 10 最後に、翁は冷笑って一本の五寸釘を取り上げて、少女の眉間に打込むとして、片手に握った鉄槌を振りかざして、片手に持った釘を白百合のよ
うな額にあてた刹那だ。（小川未明「点」『文豪怪談傑作選 小川未明集』〈ちくま文庫〉124頁、一九〇九年）

かつての「額」は「眉間」を含んでいたようなのである。現代語で、苦悩の表れた顔を指して、「眉間にしわを寄せる」のように言うが、本稿で述べてきた、「額は晴やかで」の「額」、あるいは、「額を曇らせる」・「額に影がかかる」で、困る様子・憂鬱な様子を表す時の「額」も、「眉間」を指している（そして、眉間にしわを寄せることが、「額」の曇りや影を作り出す）と考えるとき、この表現が理解しやすいように思われる。

なお、次のように、「額に八の字を寄せる」という言い方があるが、この場合の「額」も、「眉間」を指すものと思われる。（この言い方は、現代語でも用いられると思うが、この場合の「額」が「眉間」を指すという意識は、現代

ではなくなっているかと思われる。）

- 11 翁は決して、饒舌愛嬌のある人でない。極く沈んだ憂えを帯んだ額に八の字を寄せて、蓬のように蓬々とした半白の頭を両手でむしるように悶えることもあるかと思えば、また快活に語って恰かも神々しい天の光を認めようと浮き立つ場合がある。（小川未明「点」『文豪怪談傑作選 小川未明集』〈ちくま文庫〉118頁、一九〇九年）

- 12 「この頭と此の世界とはどうもシツクリ合わんもうさらばだ。（略）」
ブラウンは額に八の字を寄せ、いつもに似合はぬ気短になって鋤の柄をバタ／＼とたたいた。（チエスタートン 直木三十五訳「作男ゴーの名誉」『ブラウン奇譚』〈平凡社〉103頁、一九三〇年）

六 終わりに

以上、「額は晴やか」の意味するところは何かを中心に、「高瀬舟」の喜助に関する描写を、どう解釈すべきかについて、考えるところを述べてきた。

注

- (1) 以下、用例の引用に際しては、振り仮名を省くなど、表記を変えたところがある。また、近代の用例の採取にあたっては、次を利用したところがある。

・ 青空文庫 <https://www.aozora.gr.jp/>

- (2) なお、同じ、「高瀬舟」の、「弟の目の色がからりと変って、晴やかに、さも嬉しそうになりました」（216頁）についても、「晴やかに」と「嬉しそう」の指すものは、異なるものであると考える。ここは、いずれも、喜助が、自分の、弟理解を語る部分であるが、「晴やかに」は、単に、それまでの「憎々しい目」ではなくったことを言っており、それに対して、後者は、それを見た喜助が、推測として、そのように感じたものと見ることができると考えられる。そして、そのことが、「さも」という言葉に表れていると考えられる。「さも」は、次の例のように、「事実はそのようではない（かもしれない）」が、そのように感じられる「内容を述べる際に用いられている」。

李は温の所を辞して、徑ちに魚家に往つて、玄機を納れて側室にしようと云つた。玄機の両親は幣の厚いのに動された。

玄機は出て李と相見た。今年はもう十八歳になつてゐる。その容貌の美しさは、温の初て逢つた時の比ではない。李もまた白晳の美丈夫である。李は切に請ひ、玄機は必ずしも拒まぬので、約束は即時に成就して、数日の後に、李は玄機を城外の林亭に迎へ入れた。この時李は遽に発した願が遽に慳（かな）つたやうに思つた。しかしそこに意外の障礙が生じた。それは李が身を以て、近（ちかづ）かうとすれば、玄機は回避して、強ひて逼れば号泣するのである。林亭は李が夕に望を懐いて往き、朝に興を失つて還るの処となつた。

李は玄機が不具ではないかと疑つて見た。しかし若しさうなら、初に聘を卻けた筈である。李は玄機に嫌はれてゐると思ふことが出来ない。玄機は泣く時に、一旦避けた身を李に寄せ掛けてさも苦痛に堪へぬらしく泣くのである。（森鷗外「魚玄機」『鷗外全集第十六卷』〈岩波書店〉109頁、一九一五年）

梅をせき立てて出して置いて、お玉は甲斐甲斐しく襷を掛け袂を端折つて台所に出た。そしてさも面白い事をするように、梅が洗い掛けて置いた茶碗や皿を洗い始めた。こんな為事は昔取つた杵柄で、梅なんぞが企て及ばぬ程迅速に、しかも周密に出来る筈のお玉が、きょうは子供がおもちゃを持つて遊ぶより手ぬるい洗ひようをしてゐる。取り上げた皿一枚が五分間も手を離れない。そしてお玉の顔は活気のある淡紅色に赫やいて、目は空を見てゐる。（森鷗外『雁』〈新潮文庫〉100頁、一九一五年）

引用文献

- 小泉浩一郎（一九九〇） 「『高瀬舟』論—〈語り〉の構造をめぐって—」
（『近代日本文学の諸相』〈明治書院〉）
- 角谷 有一（二〇〇一） 「プロットの読みを深める」 （『文学の力×教材の力 中学校編3年』〈教育出版〉）
- 松田 典祀（二〇〇九） 「庄兵衛の「問い」を問う—教材としての「高瀬舟」論—」 （『皇學館大学教育学部研究報告集』第1号）
- 三好 行雄（一九八九） 「『高瀬舟』論—知足の構造」 （『別冊國文學 N 0. 37 森鷗外必携』）